

## 大曲の花火 誰でも楽しく 視聴覚障害者招きイベント (東奔北走)

2018/10/5 22:00 | 日本経済新聞 電子版

全国的に知られる「大曲の花火」の地元、秋田県大仙市で視聴覚障害者も楽しめる花火の試みが動き出した。花火の爆発音を振動する機器で伝えたり、会場内のアナウンスを聞こえやすいスピーカーを設置したりと今までにない工夫を凝らす。障害者も健常者も楽しめる花火大会をめざして全国の花火師が準備しており、13日に披露される。

「振動と花火が上がるタイミングがマッチしていない」「首からぶら下げるのは苦しい」――。

9月15日に大曲商工会議所で開いたワークショップ。視覚障害者4人と聴覚障害者6人が様々な意見を熱く語った。

障害者が試したのは、壁面に映し出した花火の映像と音声に連動して携帯電話のバイブレーターのように振動するネックレス型の「H a p b e a t」。東京工業大学発のスタートアップ企業、H a p b e a t（横浜市）が開発した商品だ。

全国の花火師が2016年に設立した一般社団法人日本花火推進協力会（東京・中央）が障害者を招いた。同会は、20年の東京五輪・パラリンピックに合わせて東京港一帯で開く史上最大の花火大会「H A N A B I 2020」を実現する目的でつくられた。

H A N A B I 2020に向けた試みとして、13日に開く「大曲の花火―秋の章―」で障害者も楽しめる花火を実験する。中盤の約10分間、振動する装置以外にも多彩な取り組みを準備している。

同伴者を含めて約100人が座るパイプ椅子席のエリアの前には2種類のスピーカーを置く。サウンドファン（東京・台東）の「ミライスピーカー」とユニバーサル・サウンドデザイン（東京・港）の「ソノリティ」だ。いずれも音が遠くまで届き、クリアに聞こえるという。

13日の「大曲の花火―秋の章―」では、打ち上げる花火の種類を説明する場内アナウンスに加え、花火に合わせてディスコソングや映画のテーマソングなど音楽を流す。また朗読劇で花火の情景を表現する予定で、難聴者に聞こえやすい環境をつくる狙いだ。



ワークショップで花火の音に連動して振動するネックレス型の装置を試す視覚障害者（秋田県大仙市）



花火玉を2つに割った模型に触って内部の様子を確かめる視覚障害者



8000発の花火が観客を魅了する（秋田県大仙市提供）

このほか、スマートフォンアプリ「UDトーク」を利用して場内アナウンスをリアルタイムに文字で表示する。触れることができる花火玉の模型も用意する。

7月から2度のワークショップに参加した聴覚障害者の男性は「（場内アナウンスが聞こえないため）打ち上がる花火が何か分からず空を見上げていたが、今回は文字で読めるのでありがたい。本番が楽しみだ」と話す。

花火大会は足場の悪い河川敷で開くことが多く、大勢の観客で混雑する。「バリアフリーについて何も対応してこなかった」（協会の井出直美コーディネーター）との反省もあり、今回の試みに至ったという。

大曲の夜空を彩る8000発の花火。協会の理事で小松煙火工業（大仙市）の小松忠信社長は「障害者の方が望むことを整理して、今までと違った花火を提供したい」と意気込んでいる。

**▼大曲の花火** 1910年に諏訪神社祭典の余興として始まった。8月の最終土曜日に開く全国花火競技大会（夏の章）は一流の花火師が腕を競う。2018年は秋田県大仙市の人口の9倍の75万人の観客が集まった。地元の花火業者が5社あることなどから毎月花火大会が行われている。このうち年4回を規模の大きい「四季の花火大会」としてPRしている。

（秋田支局長 早川淳）

許諾番号30066063 日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

**NIKKEI** Nikkei Inc. No reproduction without permission.